



紫氏教川
全

特 別
A5
6590
23



八五
6590
23



土佐城東き原南真社 清水庵 柳齋編

清水河

四邑大港社

微笑仙

三圃坊撰



南真社一連下司氏新高のめし乃
門下のふ家水ありと曰時後のことしく
長きそいなるを教をそふも潤るるやせ
陰く物ありき濁るまはけきしけを乃
味し草しれふしそてはく若し
む老美の濁るをききしそをほみ川
とて多能甲人の号ありしそ今

序

三

きりれなく拙き痛きといふ
かきと書つて存す。

昔天保甲辰年

冬月

大港袖

漱安仙



奥のこゝに居ては長久不遊假名なりよ 三國坊

海一み憐るこゝのまら乃志 柳舟

餅酒もみみふ安まの代るなや 一止

実茂古代の伊勢の神垣 霍仙

根回りのこゝに居てはゆきみ 換石

おもひのまを假名不延残 后樂

或時ハ風の香ありは共同信の子 文交

方渡るる快麗なり 五禽

瀬りと阿る日星のまうも月の出 可水

雅俗賑々八束後北條 如松

右十句表

名録各首書畧

珠ふもま。歌のあまふらほま 大巻 可水

峠こもり人獲るしみるう都 豊運 換石

立移くわ不勤を仰くほろ可程 後市 后尔

原を居る子てえんまほろ 文 文是

や、星のこく秋ひりー 吉原 一止

ぼてくく星の名を伺 黒岩、吉原村

禁くく力く 如松

身を穴大て口ほらら 五倉

有る名も唯人る多れやある人なりとや
昔門先ふ下の鳥ありあまのいづれのまゆ人の
たふとくつをまをーんはむお夕のあをほし
まきり人ま業の粒く辛苦のけをーのく
のこす はれ 甲のの は 借 し 心を よ みて て 文
港のへくと同 く 所 あ ひ ま ち ら 成 日 の 舎
みは 清 水 を 歩 み 味 し ま 英 吟 を 揚 げ

瀬りと阿る。是のまうも月の出 可水

雅俗賤カ八束 松花 如松

右十句表

名録 各首書目

珠カふも。歌のまうも。 大巻 可水

峠カも。人獲る。 豊運 松石

立カ移る。不動を仰ぐ。 后尔

原を居る。てえ。 文夏

心カのこころ。 吉兼生 一止

波カて。 霍仙

禁カ々。 如松

心を定めて。 五倉

有る。各も。唯人。る。多。れ。ち。ある。人。ち。り。と。や
昔。門。先。亦。下。の。身。あり。如。是。い。つ。れ。の。ま。何。人。の
た。ら。ま。と。り。の。ま。を。一。ん。ん。お。お。夕。の。ま。を。し
ま。ま。人。の。業。の。粒。と。辛。苦。の。汗。と。一。の。く
の。と。子。は。れ。可。命。の。流。借。り。心。を。ま。ま。て。文
港。の。へ。く。と。同。く。所。在。ひ。ま。ま。ら。う。或。日。の。舎
み。は。清。水。を。歩。味。一。ま。英。吟。を。揚。り

ふと因る所の深き一感一品也
小松を遠きつる御一々少くもせし
に乘りて之をこつとつる御珍ふす句
表とるなりぬやうく小冊子也して程を
たてての風をうけ清き息して値句を乞
ふ日あつた候つたの心をいへぬるなり
方回の書り候つたてをよみ別人の面のこと
くこそいふらんに或る人の程をたえんはまよ
らんとおこりし候ふなりとのちまは集をみ
人人は御をよみてはあつと一揃してその程を
備へんやうとて集をうけあつたなり

愛らるる人の心をくむはん状

清水齊
柳齋

その件の通

○

あふ手にも名のこころ一いつる

大徳寺田村七五郎
一啼

あつたてのまにまの清き水は清なる

物部秋
美述

此の世にありしをきくをうつてう

田村
如光

流石の南のうらむるはあつたの事

あつた

なまのあつたをよみてうらむかな

下時
南江

あつた水はあつた静の信をよみ

那
地坑

追加

あつた

三

栢實珠白部武門のうらなひは多々如有 壺友

日のうけに風おこるるは多々如有 旭松

やまうらなひは多々如有 壺友

味の形さうのこも多々如有 壺友

心をわたりて多々如有 壺友

涙佐川のうらなひは多々如有 壺友

あられ井やほある多々如有 壺友

冥本末のうらなひは多々如有 壺友

道標より遠くを多々如有 壺友
まよひの岡の人のまよひを多々如有 壺友
てきまゝに多々如有 壺友

涙須崎のうらなひは多々如有 壺友

鳥を合号して多々如有 壺友
柳を合号して多々如有 壺友

まめを合号して多々如有 壺友

遠方文通美濃のうらなひは多々如有 壺友

いづれも多々如有 壺友

陸奥川

見送ぬ人のこゝろやあはれきん、
一尋

早稲中一の日あけのぼるをきこたり、
舟尾

心もあやふしりし多の山崎、
枕石

一あふみえり五月白の桐子と神、
文春

そわそわ書をもとめや雪見中、
之橋

涼風を伝ふる信もたると神、
巴水

世のちり地跡もあはれし春の月、
花山

梅落る雪や梅さくさくも地、
京之

五月雨やさき涼山吹のふしの聲、
其高

赤のむしりもあはれしあはれ根、
菴二

五月雨や露の枝遠くあはれ下根、
藤三

梅も雪や雪も晴るるあはれ御、
松運

あはれとあはれ月あはれしあはれをらふ、
盛月

振袖も約指しあはれしあはれあはれ、
字江

五月雨やあはれしあはれあはれあはれ、
たの

草分るるもあはれあはれあはれあはれ、
繁三

喜八

時日や多敷くある分経、
杜蒙

六月もさへ時日たのしむの事、
可橋

葉のちのちの心のおや濡れぬ
十日
日六

獲あつてはさきしはさきぬ多し、
格以

お命の日今年お終る日者さし年、
世花

たあ送る月也さきさう、
心月

分多ふさきさきさくふの石洞のほろろ、
心月

吹れても元の柳へほろろの柳、
柳系

世の事多しきやなる月、
以翠

心月さきさきさくふの石洞のほろろ、
暮

四方さきさきさくふの石洞のほろろ、
三香

人さきさきさくふの石洞のほろろ、
罪

お命さきさきさくふの石洞のほろろ、
習

さきさきさくふの石洞のほろろ、
足

心月さきさきさくふの石洞のほろろ、
心月

さきさきさくふの石洞のほろろ、
音石

懸色の月もまらりる春の夜、
曼

ほてり梅の影もあつたはあ、
田 櫻

東の山ももも春の夜はあ、
花

夕物涼月のあつたはあ、
中 可憐

夏の夜はあつたはあ、
生 松

冬はあつたはあ、
冬 魯道

言はれりよのあつたはあ、
冬 園

白のあつたはあ、
冬 魯

七月のや福のあつたはあ、
花 花岳

後窓のあつたはあ、
鷺 江

咲蓮のあつたはあ、
琴 松

あつたはあ、
李 梨

降るる梅のあつたはあ、
魯 蕪

月の秋雲のあつたはあ、
李 松

住の鼻月のあつたはあ、
此 君

あつたはあ、
遊 耳

五月の白や薄き花む鳥の子（中）桑畝

志しむ花やわさるの交る子の園（後免）嘉翠

紫の原小舎むや 花乃花 南枝

赤越く志はぬ風のうらみり（皆星）蘭石

青くもや花をけり田も扇飛り 里伯

雲少しを夜もつ花や 花乃花 磯永

夏は心日和もるの気交り那 欽古

ささく水や花も都も花菜こもの 松二

花のまやわさるの若る宵乃 雨（日野）芙蓉

吸はぬ、花の干上る柳まき、 素乃

己月もやぬりきうさう花一羽、 生白

牡丹又のまを立ぬる雨向く那、 不石

追風たそ、帆影小磯る暑きう那、 池月

秋玉照る日の色あや、 花のこ、 集和

花赤あやれり、 花牛、 尤選

あはれもふくも薄き、 花田草那、 選豆

一ツの事も懐くわくわく——五月晴

和倉水運堂
院子冊

杖曳ハ風も甚きるや 椿乃月、 牛松

岩間もるるや けりきるあま、 玉里

遊のちえきあしとぬか堂う那、 琴松

うらさうら帆柳のそけハをらの家、 一柳

耳あみ以笛のきききや 友北月、 志厚

柳もゆを干くさるる阿梨己月晴、 上枝柳

系柳の裾ハ流れぬ 桂々那、 素風

多知のちりー破戒をゆるおもひく那、
須寄十扶社
雲居

毛のそややくわ新小ゆき、 素柳

けり降くーまも竹の帯くきりる、 李福

豆くわわやまの思う思くぬ花の色、 辰巳

花いあをうこくーもせんひるの枝、 巨岬

きくさの遊法きりぬーをそお柳、 旭扇

遊るくふの藤くくーをくさ、 介遊

撰るを笑めあふぬや 百日ぬ、 海耕

色を世々風ふ春風——
砂行

柳をくちう——に定るはありけ、
宇敷

唐路のあまう——
兀山

わく深く白華月——
鶴

白鳥の表河うた——
徐松

琴路の影舟の中や宵の月、
輔友

春風や舟を流さるる——
居快

足韻を扇てま——
静楽

志あろ——日あはれ水ある——
波英

郊の花う整——
紫芳

父あやう——
如水

石——
尾昌坊

父之や——
流丸

順礼のち後身——
柳水

拙多のち——
柳屋

一——
素葉坊

巻一

花ハ世の業ハ消ウラリ鶯の心無 伊野 徐趣

とよく草の層々々々——鳥北月、 晴候

このまゝの目わめは——花、 松和

茅の輪——花——心、 鳥有

数段——花——夏の月 高府律師 三曉

のこる月——花—— 新 花仙

不二山の雲——秋、 摺石

白蓮——花—— 花、 花曉

夏——高、 素月

寂寥の心——花、 隈之

心を憂人の世や——二、 梅

のこる花——花、 花月

垣向——高、 延志

梅雨晴や——花、 松下

その柳の心——花、 兼志

まゝ——花、 花園

花月

花

あまの暮れもあけもあけの月、
柳葉

時晴の夕山まき、五月の車、
花全

あけくさあけ風生るやまの舟、
柳舟

風おりくさの鳥あけ暑さうら、
夏後

牡丹や柳のまきの色あけくさ、
素白

あけくさの月のあけあけあけくさ、
呉石

あけの明山あけくさあけの獨り舟、
瓦石

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
露底

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
吐玉

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
二帆

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
佳伴

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
獨笑

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
柑口

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
柳葉

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
頭傍

あけくさあけくさあけくさあけくさ、
里井

あけくさあけくさあけくさあけくさ

夕月や世の身おろしくせん 也羽鶴鳥也

城をこしふともの身ひやま 江戶屋 二葉坊

懐入るる心し夜 尾張行脚 里桂坊

さきくけの 尾張行脚 故淨

抑多名人の凡雑也
信何れを

風流 發行脚 羽卒雨

古人の歌

糸 夜高 柘

度 後免朝暮 三四

露 土田日 秋化坊

手 阿所柳後亭 女雪

出 武門 兼花

は集の如い之何るやうかへたる
おのれ病の糸ありぬるま
舊他を忘るしとてあつた
け士この白お首りと思へら

海 弁乾山 鶴巢

こしーあ

汗のあゝはた

後やこひ

しんろ

養
延興年

負外

さるころの儲安のあつたを乞根あり
ちりも免初しうおろろり山もあまけ
年文庫のあ入迄も礼をさふ平多ふ
こゝい思ひまゝに恨の毛のほろけこゝろ
おろしき恨ちりくはふものせよこ魚作
の命をとりけり一うをばくる

木の旨く〜日ふ取くゆ

門徒あり

法
九年
柳
多
録

あふ成時月三言ほめさるの秋揚ふんさる
これほ遊の秋をゆもるに依信の志を
厚く一粒のあつたを乞根あり
おけまのりせふを落書のことへ何
おとぬまのりせふを落書のことへ何
伸諸人も助る益を解りてく人あ
了てそりて

下

上

終る 君がもきこりめいさうと宗家
長文の陽造ちさき梅を脱凡

春の和らき
其の懐く
秋の舟
冬く山

美し及むるれは

法水居

道徳十
魯松
心

幼き世の年一出冊

